

連載
博聞意伝 世代を超えて未来を語る

第28回

中村喜久美 ———— 「聞き手」 澁澤 健

(THE NAKAMURA 代表) (モンズ投信会長)



中村 喜久美氏

澁澤 健氏

群馬生まれ、栃木 宇都宮に嫁ぐ

澁澤 この対談「博聞意伝」は、『ほぼづゑ』同人の先輩から今日までの来し方をうかがって、それを次代へのメッセージとして記録し、お伝えしようというものです。中村さんは『ほぼづゑ』第三十二号（二〇〇二年春）からの同人であり、私は第五十号（二〇〇六年秋）から同人に加わりました。したがって中村さんは私にとって『ほぼづゑ』での先輩でもあり、中村さんが体

験されたことをつぶさにお聞きし、それをいかに現代から未来に繋げてゆけるか、考えてみたいと思います。

中村喜久美さんというとホテルの経営者であり、有識のご婦人のイメージがありますが、遡ってどのような幼少時代を過ごされたのでしょうか。

中村 上毛三山といわれる、赤城、榛名、妙義という山々に囲まれた、群馬県の前橋という街で昭和十三年に私は生まれました。私の父は銀行員でした。母は専業主婦で、良人と母親（私の祖母）を支える日々を送っていました。空襲がひどくなった戦時中の末に、父を残して私たちは赤城山の麓の勝沢という村に疎開しました。そこは山の中腹で、群馬県に点在していた軍需工場を爆撃するために鹿島灘方面から飛来したB29を見て取ることが出来ました。その爆撃の光景は、今もはっきり覚えております。

澁澤 それは恐怖の記憶ですか、恐ろしいと思える光景でしたか。

中村 そうですね。幼かったということもあったので

「中村喜久美の回想記」

私の故郷前橋は終戦直前の八月五日、B29の襲来により焼け野原となった。父だけが家に残り、私たち、祖母、母、二人の弟と私は赤城山の中腹、勝沢村に疎開していた。大切な食糧源である山羊を連れて農家の離れ家に暮した。幸い大家である農家の野菜など分けていただき、近くの沢で洗濯をし、夜は丸いチャブ台をかこみ、土間にいる山羊と会話をしながら一汁一菜を頂く、そんな生活であった。

低い、うなる様な音と共にB29はやって来た。村の半鐘がなり防空頭巾をかぶる。

中空に一斉に火花が散り、焼夷弾が四方八方に飛び散る。夜空は一瞬紅色に染まる。そして数分後にはあちこちから火の手が上り、炎はクルクルと廻るように辺りをなめ尽してゆく。

私たち五人は手をつなぎ、息を止めて見守った。翌日朝家を守っている父の無事を知りたいと山を

しょうが、花火のようにも見えました。……ところが、翌日前橋に帰る折に、あたり一面焼け野原で沢山の焼死体を見ることになりました。その時、疎開生活も楽ではなく、おさな心にも〴〵人生ってこんなに苦しい辛^{つら}い思いばかりでいいのかな〴〵と思ったものです。そして私が小学校の一年生の時に終戦を迎えました。

澁澤 ご兄弟はおられたのですか。

中村 はい、弟が二人おりました。二人の弟のうち一人は後に病没しました。

澁澤 ご姉弟の仲はよろしかったのですか。

中村 姉弟仲はよかったと思います。私の家族は音楽の愛好家族でして、父が京都大学の学生時代からフルートを吹いていて、オーケストラの一員でもあったようです。そして子供たちにも音楽をやらせたいというので、週末に音楽の先生が家に来られていたのですが、それが嫌^{いや}で、姉弟三人でしめし合わせて逃げ回っていました。そのように仲のよい姉弟でした。

澁澤 お父さんはどういう方だったのですか。

下った。幼い下の弟を乳母車に乗せての山道は辛かった。

山の道では何度も乳母車がすべり落ち、私は必死で母を支えた。貯水池の廻りの道は狭く何度か落ちそうになった。

汗びっしょりになり誰もが寡黙であった。ただひたすらに父の無事を祈りながらの下山であった。

やっとの思いで紅雲町あたりに到着する頃、日がさして来た。見ると黒煙を上げて燃えている柱の側に人々が横たわっていた。生き残った人たちがただ黙々と焼跡を動いていた。百軒町あたりに着くとそこには死体の山が出来ていた。祖母、母を真似て私たちも手を合せ拝みながらひたすら父の居るであろう家に向った。

父に会えた時の喜び、抱き合ってたただ泣いた。幸いにも土蔵作りの家は焼け残り、父はすすまみれた顔で笑ってくれた。私たちも真黒で、汗にまみれていた。

(なかむら きくみ)

中村 父は婿養子として入った人で、礼儀正しくて実直でまじめな人でした。

澁澤 そうですか。

中村 かつて催した集会の記録が残っておりまして、そこにお招きした方々のお名前が記されていて、その中に渋沢栄一様、当時の東京市長などのお名前がありました。お導きいただき、新しい鉄道の計画などありましたようです。群馬や長野の振興にお力をつくして下さったのではないのでしょうか。

澁澤 渋沢の出は現在の埼玉県深谷市ですから、同じ北関東の文化圏にあつて、殖産の振興にご縁があったのでしょうかね。

中村 そうですね。埼玉の深谷、寄居、群馬の高崎、前橋、足利などは養蚕などを中心とした同じ殖産の文化圏ですね。私は群馬の前橋から栃木の宇都宮に嫁いだのですが、前橋に里帰りで帰る折、足利を通して帰省し、それぞれ街の趣きは違うのですが、比較的短時間で移動できる距離です。

澁澤 渋沢栄一の『論語と算盤』（大正五年）の中にも出てくるのですが、足利は平安・鎌倉期に創設された足利学校があつたところで、早くから教育意識の非常に高いところですね。

中村 そうです。私は近年（二〇一一年秋から二年九月間）、ロスチャイルド家の一員である友人（シャルロット）の誘いで、ロンドン近郊の町エクスペリーにあるロスチャイルド家の城館の一間に住まわせていただきました。その間、図書館などに通い、辞書と首っ引きで日本に関する本を読ませていただきました。興味の趣くまま読んだのですが、その中に〴〵足利学校〴〵に関する記述があり、日本に古くからある最高学府〴〵という説明が付されていました。

エクスペリー庭園へ

澁澤 中村さんが『ほぼづゑ』に書かれた滞英紀行文を読ませてもらいましたが、ロスチャイルド家のシャルロットさんとの出会いはどうのような経緯^{いきさつ}だったので

すか。

中村 私の二人の娘が高校に通っていた折、フランス語が出来なくていつも母娘で悩んでいました。主人から「フランス語の家庭教師をつけるように」と言われまして、上智大学の知人に相談したところ、哲学科のルソー先生が教えて下さるようになりました。そして紹介して下さったのがシャルロットさんでした。シャルロットはオラトリオ（クラシック音楽における楽曲の種類。日本では「聖譚曲」）の歌手で、日本に紹介したいのだが、と言われたのです。その後程なくしてロンドンでルソー先生とお会いしてお食事を一緒に折に、シャルロットさんをご紹介していただきました。今から三十数年前のことです。そうしてシャルロットさんとの交際が始まりました。私が、主人の亡きあとホテルの経営を引き継いで以降のことですが、ホテルの主催で彼女の歌のコンサートも何回か開催しました。

そして、シャルロットさんの誘いでお住まいのエク



エクスペリーのロスチャイルド家の城館

ブロックンハースト駅に着き、ここで下車します。ロンドンからの距離は約七十マイル（約百キロ）、約一時間半の旅路です。さらにエクスペリー庭園には車で約十五分です。私はこの庭園の環境がとても気に入って、家業すべてを長男に譲り、先ほどお話ししたように二〇一一年から二年程この地で暮らしました。

スベリーにあるファミリーの城館をお訪ねすることになり、経済同友会のイタリアへの研修旅行のあと、一行から離れて私一人でロンドンに赴き、エクスペリーをお訪ねしました。

澁澤 エクスペリーの土地柄と、その周辺の様子を少しお話して下さいませ。空路まずロンドンまで飛んで、ロンドンからはどのような経路になりますか。

中村 ロンドンから、車では二時間弱というところですが、鉄道だと、イギリス海峡に面した、南部の都市・サウサンプトンを目指します。ここのサウサンプトン港は、豪華客船タイタニック号が一九一二年四月に、アメリカ、ニューヨークに向かって船出をした港としても知られています。また、歴史好きの私などは、一八六三年（文久三年）六月、明治維新前の長州藩の気鋭の五人（長州ファイヴ 井上聞多、遠藤謹助、野村弥吉、伊藤俊輔、山尾庸三）が、イギリス留学の藩命を受けて苦難の末にサウサンプトン港に辿り着き、鉄路ロンドンに向かったことに思いを馳せます。

澁澤 とてもいい体験をされましたね。その城館での中村さんの居住スペースはどのようなものだったのですか。

中村 城館の外観は三階建ての方形で、全面ベージュ色の外装が施されています。建物の内側は吹き抜けの中空ですが、一部分円型の中空構造（ロタンダ）になっています。その二階の一部分に住まわせていただきました。城館の周囲は広大な芝の庭園がめぐらされていますが、その周縁には季節折々に開花する花樹がふんだんに植えられていました。屋久島から移植された「ヤクシマナン」と名付けられた植物など、世界の各地から集められた植物が見られました。

そしてなんとも長閑なのは、馬が自由に解き放たれていて、私が日本の唱歌などを口ずさんでいると、人懐こく近づいて来ることでした。

澁澤 イギリス・ロスチャイルドの三百年の歴史の中で、日本の唱歌が流れたのは稀有なことだったのでしょうかね（笑）。

中村 唱歌だけではなくて、古い館やかたですから私の居室で料理をすると、城館全体に匂いが流れて行くらしく、〃キクミの料理の匂いはとてもいい匂い。レシピを教えてください〃ということになり、友人などに日本の家庭料理の手ほどきをしました（笑）。特に好評だったのは、茄子の味噌炒めいたで、私の嫁ぎ先が味噌醸造をしていましたので色々な味噌料理を披露しました。それと里芋のような当地産の芋とお肉を合えたものが好評でしたね。

高校時代はテニスに熱中

澁澤 日本の北関東で生れ育ち、そしてイギリスでの生活の一部をお聞きしましたが、イギリスははじめ海外とのご縁は結婚されてからですか。

中村 そうです。私は群馬の中学を出て、文京区にありましたお茶の水女子大学の付属高校に入りました。が、あの学校は、貞明皇后（大正天皇皇后）様が、優れた女性の官吏を育成するためにと開校に意を注がれました。

たという学校で優れた先輩方が多くおられます。ただ当時私はテニスが好きで熱中しており、テニスでは高校時代に優勝しました。

澁澤 すごいですね。全国ですか。

中村 いえ、東京都の大会です。そして個人ではなく団体戦です。私は前衛でボレーを専門にしていました。昭和三十三年、高校二年生の時です。

澁澤 ご実家は前橋でしたね。

中村 戦後の農地改革（農地解放）で多くの田畑を失い、〃一夜貧乏〃まさに一夜にして貧乏です。以後質素な生活を強いられていたと思います。学校の制服にしても一度買って貰ったものを袖口などがピカピカになるまで着通すという有様でした。

澁澤 終戦の時に小学校一年生だったと伺いましたが、終戦を挟んで世の中が激変するのを目の当たりにされたということですね。

中村 はじめにお話しした前橋の空襲は、終戦の直前八月五日深夜のことでした。市街地の大部分が罹災し

ました。ところが私の実家は家の周りまわを土堀で取り囲んだ蔵造りでした。幸いに焼け残りました。なぜ土堀で囲んだ家にしたかという点、以前、周りにも類焼を及ぼす火事を出したものですから、火を出しても周りに及ばないということとで蔵造りにしたようです。それで戦災はまぬがれたのですが、私の幼少時代の記憶の中の我が家は、薄暗い土蔵造りの中でした。

ことに家の中央部にあった私の部屋は、昼間でも暗いところでした。そして、戦後の実家の暮らしは大変でした。そうした実態を見て育ったものですから、懸命に勉強をして、将来は官吏、役人になろうと思っていた。

澁澤 受験し大学に進まれて、その後は官吏への道を目指されたのですね。

中村 そのように私は思っていましたし、母もそのように言っていたのですが、生活のために近所の子供たちを集めて習字を教えていました。そして周辺の父兄たちの要望もあって幼稚園も始めました。そしてその

幼稚園の卒業生の一人が、後に映画監督になられた小栗康平さんです。まだ他にも、後に活躍された方が多くおられます。母の決断は間違っていなかったのかなと思います。

澁澤 それで、官吏を目指された進路はどのような経緯を辿ったのですか。

中村 ある農業実習の日にテニスの試合を見に行っしまいました。良くない生徒でした。反省し勉強に精を出しましたが、英文学者への夢が芽生えて慶應の英文科に進みました。そうして学校にも勉強にも慣れ、教授の訳を手伝っている二年生の時に、実家の祖母が脳溢血で倒れて病床に着いてしまいました。祖母が「喜久美の花嫁姿が見たい」と言うものですから、なんとなくトントンと話が進んでお見合いをすることになりました。

澁澤 お見合いは初めてだったのですか。

中村 その前にお一人お会いしました。この方はお医者さんで、海外に研修に行くというので、同行する人

を探しておりましたが、私が学生だったこともあり沙汰やみになり、その次にお見合いしたのが嫁いだ主人でした。

澁澤 すると、大学の二年生の時に結婚されたのですか。

中村 はいそうです。二十歳の時です。自分としてはまだ勉学に未練があり、学籍は残していたのですが、その内に子供ができて退学してしまいました。

澁澤 それで、嫁がれたご主人はどういう家業をされていたのですか。

中村 先ほど少しお話しましたが、元々は味噌の醸造をする家で、私が嫁いでの主な仕事は、出来上がった味噌を樽詰めすることでした。十貫目(約40kg)といっていました。樽詰めを終えた味噌を数えて、トラックに運び込むのを監督する仕事でした。そして、家人や従業員の賄い(まかひ)が私の仕事でした。学生時代にサマセット・モームの和訳を二冊手掛けていましたが、そういったイギリス純文学の世界からの大きな

転換でした。

澁澤 そうでしたか。しかし、嫁がれた先の人たちには、〃東京で勉強したハイカラなお嫁さんが来た〃と受け止められていたのではないですか。

中村 いいえ、ハイカラどころか私の遠い祖先は九州でして、育ったのは群馬です。もともと栃木に縁があったようです。真岡(まおか)というところがありますが、戊申戦争の折に、新政府軍として従軍した九州佐賀藩の軍兵が栃木で戦い、真岡に土着して真岡県をつくり、その初代知事が佐賀藩士でした。ですから真岡や日光の在には真岡県知事時代以来の縁繋がりの方がおられるようです。

澁澤 栃木とは濃密な地縁がありだったんですね。それで、ホテルを興されたのはどういう経緯だったのですか。

中村 主人の実家が味噌の醸造をしていましたが、味噌というのは、軍隊の必需品でした。軍に大量の味噌を納めていましたので、第十四師団(宇都宮)にご縁

が深かったようです。終戦後に師団長の官舎を主人の父が譲り受けたと聞いております。

当時工場建設のためにおいでになっていた富士重工や日産自動車の方々の宿舎としてお貸ししていました。それを料亭を兼ねた宿舎にすることになり、私が嫁いだ時には割烹旅館陽南荘として運営していました(昭和二十九年設立)。この旧師団長の官舎は、そもそもこの地を治めた宇都宮氏の祖・藤原宗円にちなむ邸宅で、庭は名庭園の名残りをそのままに今に伝えています。

澁澤 すると、ご主人のお父さんがホテルをつくられたということですか。

中村 いえ、主人が広く一般のお客向けのホテルにしたいということで、昭和四十六年(一九七一年)にホテルとして開業しました。

ホテルを育てる

澁澤 ご主人は早くに亡くなられたんですね。

中村 昭和六十年になくなりました。五十歳でした。私が四十歳の時です。主人はホテルの開業だけではなく、地元の政財界の有志の方々と、那須の開発事業だとか様々な事業の構想を持っていたようです。結局自身の病とともにご破算になってしまいました。

澁澤 どこを患(わづ)われたのですか。

中村 糖尿病を悪くしていて、最後は心筋梗塞で亡くなりました。

澁澤 それで、中村さんが四十歳でホテルの経営に当たられたのですか。

中村 急なことで何も分かりませんでしたが、社員方に支えられました。

澁澤 ホテルの経営者になられて、初めは大変だっただろうと思いますが、〃これならやって行ける〃と思われたのはいつ頃のことですか。

中村 それが、息子にバトンを渡すまで、最後まで、自信はありませんでした。でも、社員に恵まれましたね。

澁澤 ご主人の代からでしょうか、ホテルの経営をはじめ種々事業を手掛けられているようですが。

中村 主人の父から引き継いだものと、主人の代で始めた事業が数社ありました。

澁澤 そうした経営上、大切にされていたことは何んですか。これは、この対談のテーマである。次代へのメッセージをうかがう。ことにもなると思いますが。

中村 そうですね、人と人の繋がり「ご縁」の大切さでしょうか。事業でも、何でもそうなのだろうと思います。あとは「謙虚」であることと、「誠実」に接することでしょうか。

仕事柄いろいろな方々とお会いする機会をいただきました。皇族方をはじめサッチャー女史など、得難い出会いをさせていただきました。どなたも忘れることは出来ません。殊に昭和天皇、皇后陛下がご投宿いただいた折に触れた、昭和天皇陛下の穏やかなお人柄とお言葉掛けは、忘れることは出来ません。これは『ほづゑ』（第八十八号 二〇一六年春号）で詳細にご報



マーガレット・サッチャー女史と

告させていただいております。そして、もう一方心打たれたのは、イギリスの首相（一九七九～九〇年在任）を退任されて間もないマーガレット・サッチャーさんが来日され（一九九六年）、私たちのホテルに投宿して

下さった折のことです。鉄の女と称されていましたが、お人柄は大変謙虚で、思いやり深く大変感動しました。お帰りになる折には、特に貴賓の場合は社長以下、社員が可能な限り集まり一列に整列してお見送りす

るのですが、サッチャーさんは一人一人丁寧にお礼を述べられ、一番端に立ったお掃除のスタッフにまで声を掛けて下さいました。これにはみんな感激して涙してしまいました。そういうこともありました。

澁澤 そうですか。多岐にわたってお話をうかがいました。お陰様で、前橋から宇都宮へ、そしてイギリスのエクスペリーへ、そしてまた宇都宮へと、また明治時代から現代へと、時空を超えて旅することができました。人に誠実に接すること、というお言葉も、大切に頂戴します。

本日はありがとうございました。

（なかむら きくみ／しぶさわ けん）

〔二〇一九年七月二十四日 収録〕



挿画 齋 正機 《りんご 梨 みかん》